

木造建築の土壁の新原料研究に 「からむし」の混入を実験 早大建築科学生が市内伊達で



早大建築科の学生が土壁研究のため来市

市内伊達「からむし・十日町」の専門店ネオ昭和(村山好明社長)の私邸わきの木造2階建作業所の改装に「からむし」の壁土を混入して壁を塗り上げる工法を開発している早稲田大学建築学専攻大学院博士課程1年生永野聡氏をチーフとして、同大学建築科の学生5人が20日(日)来市、同社に1泊、原料の土の採集と「からむし」をきざんで土に練りませる作業を実験した。

日本建築、木造の壁土は、古来、稲藁を練り混ぜて作っていたが、稲藁の原料が稲作の刈り取り工法が変わったことで、藁として原料

のため、「からむし」を原料にする「土壁作り」の工法の研究開発をはじめたもの。土壁づくりに「からむし」を使用する実験は、同作業所で春の雪消まで行い、5月ごろ建物に壁をぬり上げ、同作業所の改装を完成させる。壁土の新開発に「からむし」を混入する実験は終り、日本建築物の土壁に「からむし」を実用にするようになる。

日本式木造建築の工法に土壁を塗るのは古来の伝統的工法であるが、壁塗り工法に原料として「からむし」を活用するのは今回が初めてで、早大生による工法開

の日本建築に、この土壁が活用されることになる。建築学会でも話題を呼ぶことになるうとの、同大学建築学科では注目されている。

学生達を引率して市内の伊達のネオ昭和社長の村山好明氏に紹介したのは、上越市の有限会社セラフの川上隆広社長で「この工法が実用化は来春からとなろうが、稲藁が建築に利用されなくなればそれに代る原料としての「からむし」の栽培が、農業部門で発達していくことになるかも知れない」と、からむし活用産業として広がりをもせる可能性を示唆していた。